

## 北海道服飾文化史資料の調査研究

### アイヌ衣服コソソテについて

福山和子

- ・はじめに
- ・「コソソテ」について
- ・コソソテの調査結果
- ・形状、構成的特徴からの考察
- ・おわりに

#### はじめに

北海道における服飾文化史の調査研究をすすめるとき先住民族であるアイヌ民族の服飾をぬきにしてはできない。そこには独自の文化と、美意識を持ち民族固有の装飾表現形をみることができるからである。ルウンペ、チヂリ、アットゥシ等の他に多くの服飾品があり、これらについては先達の研究者により研究されている。

そのなかのコソソテはアイヌ民族がその歴史において和人との交流のなかで入手した小袖を自分達の衣生活のなかに取込み着用したものとしてある。

そこでこれまでの北海道の服飾文化史資料をまとめる上で、和人との服飾交流の接点の一つとして、コソソテを調査し、資料として整理記録するために調査をすすめた。

本調査は天理大学付属天理参考館、釧路市博物館、函館市北方民族資料館、および児玉資料として収蔵されているコソソテについておこなった。本報告はそのうちの児玉資料より4点、函館北方民族資料館収蔵の1点についておこなう。調査方法は資料計測および構成方法、縫製方法の観察をとおして形態的調

査を中心におこなったものである。

また流通の経緯については記録資料が少なく、詳細な考察はすすめられなかったので稿を改めたい。

尚、本調査は第13回北海道新聞社学術文化研究奨励金にておこなったものの一環であるのでここに付記する。

#### 「コソソテ」について

アイヌ語でコソソテとは、アイヌ英和辞典<sup>(1)</sup>によると「kosonde コソソテ、小袖 n. A cloak made of Japanese material」  
「kosonte コソソテ、陣羽織、満州の上衣」とあり、コソソテは日本の素材でつくられた外套風なもの、としコソソテとは区別している。

アイヌ語、日本語辞典稿<sup>(2)</sup>では「kosonte (kosonto) 小袖」「kosonto 小袖(樺太)」とあり、和人の小袖の意である。アイヌの衣文化語彙集<sup>(3)</sup>によると「kosonte 小袖、和語の転[北海道一般]。上等の模様入りの着物及びきり、舶来のをいう。santa saranpe ani akara kosonte 山丹絹の小袖、上物の小袖(必ずしも中国製を意味しない)。kosonto 小袖 和語の転、・・・」とある。

このようにみえてくるとコソソテは和人の着用していた「小袖」がアイヌにもちこまれた時その名称がアイヌ語としてコソソテ、コソソテ、コソソト等に転化していった小袖を示す語と判断され、本報告ではその意味で取扱

い、語としては現在一般的に使用されている「コソソテ」を用いた。

コソソテはどのような着られかたをしていたかを記したものに「蝦夷生計図説<sup>(4)</sup>」がある。それには「凡夷人の服とするもの九種あり。一をジツクといひ、二をシャランペといひ、三をチミップといひ、四をアツシといひ、—— シャランペといへるは本邦よりわたりたるものにて、古き絹の服なり。チミップといへるもおなじく、本邦よりわたりたるところの古き木綿の服なり。此三種の衣はいずれも其地に産せざるものにて、得がたき品ゆへ殊の外に重んじ、礼式の時の装束ともいふべきさまになし置き、鬼神祭きの盛礼か、あるひは本邦の官役の人に初めて謁見するといふ時のみに服用して、尋常の事にもちゆる事はあらず。其中殊にジツクとシャランペの二種は其品も美麗なるをもて、もっと

も上品の衣とする事也。——とある。シャランペは前記の語彙<sup>(5)</sup>によると「saranpe 絹の衣服」とあり、本邦より輸入した小袖を意味するものである。

これらのコソソテがどのように着られていたのかを示すものに平沢屏山の蝦夷風俗十二か月屏風絵<sup>(6)</sup>の1枚「熊送りの図」には、一般にいう熊祭りの情景がえがかれている。(写真1)。この神事には男女ともに盛装する習わしである。左の写真の右から二人目の女や右の写真の古老がコソソテを着ているのがわかる。

### コソソテの調査結果

残存資料のうち、本報告は児玉資料の4点(コソソテ191、192、193、194)、函館市北方民族資料館収蔵の1点(711-39絹衣)の5点について記す。



写真1 平沢屏山蝦夷風俗12か月屏風より  
11月、12月の一部

1. 児玉資料<sup>(7)</sup> コソソテ191

牡丹模様総刺繍コソソテ

(函館北方民族資料館蔵)

形状的特色

衿はないが形状は小袖の形をしたコソソテである。しかし、前幅は一般的小袖の衿のついた幅と同じくらいの幅



写真2 児玉資料コソソテ191〔前〕

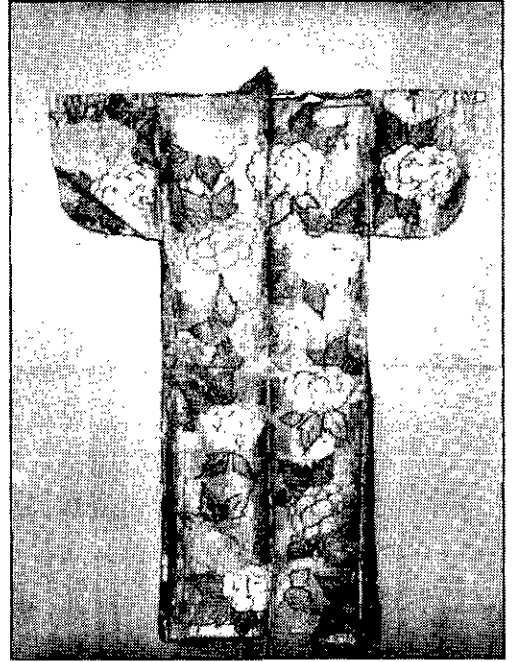


写真3 児玉資料コソソテ191〔後〕

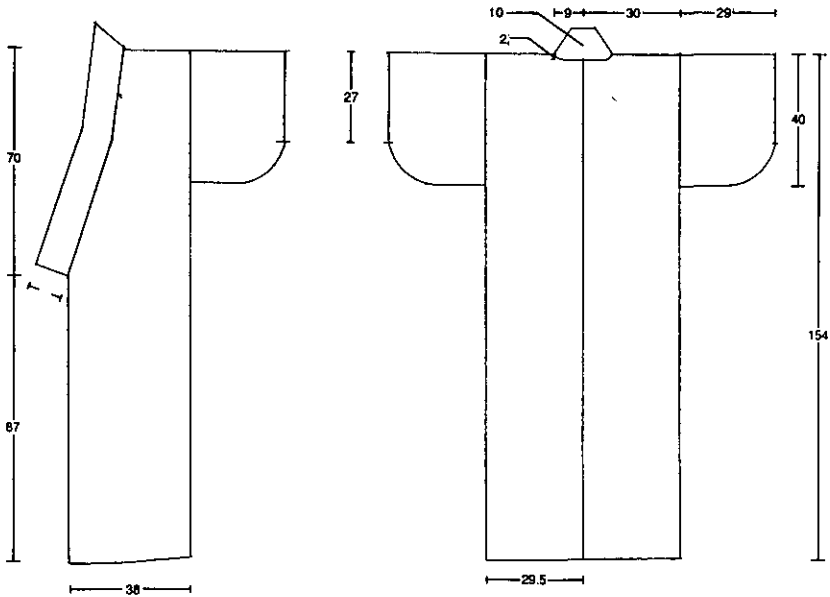


図1 児玉資料(191)コソソテ計測図(単位cm)

である。袖は元禄袖のつけづめである  
(写真2. 3)。

前身頃の衿付け線に合わせて刺繍が  
ほどこされているところから、最初か  
ら衿をつけないで製作されたものと判  
断される。裏布はついていない。

表面全体に牡丹模様の総刺繍で、金  
糸の駒止めでうめつくされている。

#### 計測寸法

計測寸法は図1に示した通りである。  
全体に身幅が細くつくられているのが特  
徴である。

#### 刺繍の特色

表面全体の牡丹の花と葉の柄の部分  
をのぞいて全体に金糸が横にわたされ

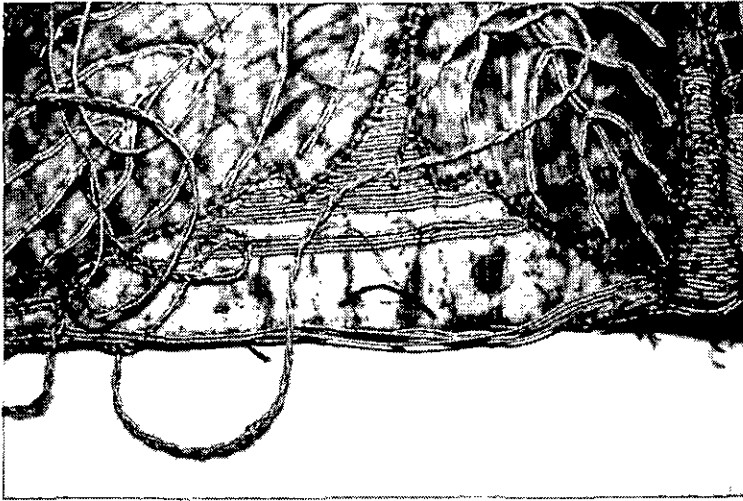


写真4 金糸を止める和紙と布  
(平糸の止めてある部分は金糸は渡っていない)

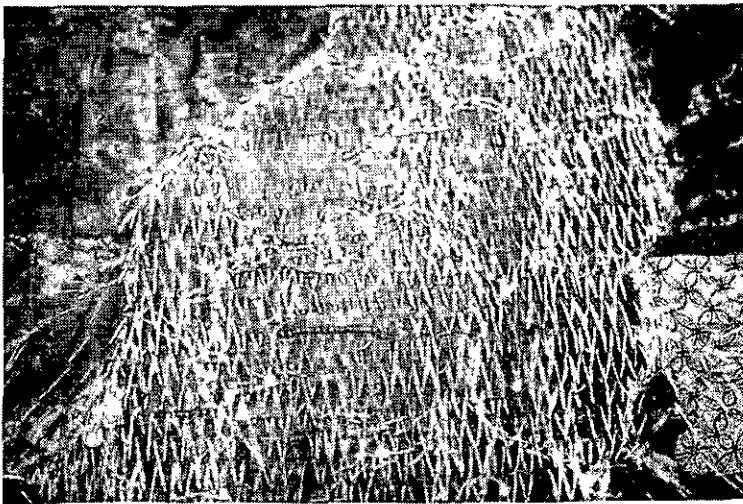
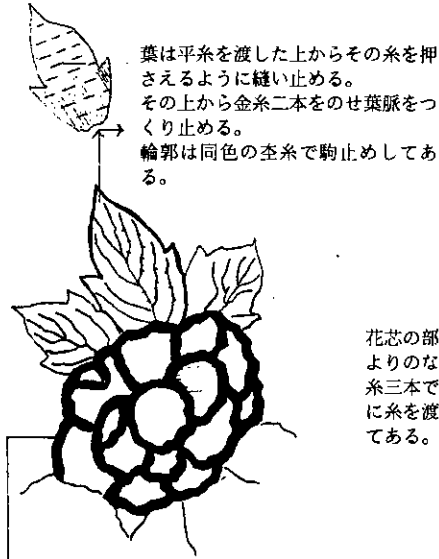


写真5 布の裏側には金糸を止めた糸がきれいにならんでいる

2本づつが駒止めされている。その刺繻は表面が金糸でその下が和紙その下に木綿布があり和紙と木綿布を土台布として刺されており、裏側は写真5のように金糸を止めた糸がびっしり渡っ

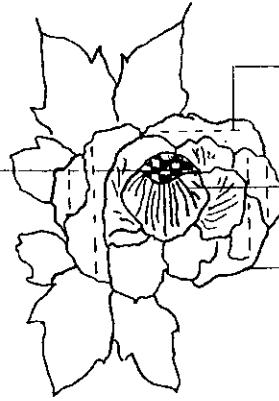
ているのがわかる。

白い牡丹の花と葉は、平糸がわたされ、それをさらに細い糸で霧押えで止められている。細部の刺し方は図2, 3, 4, の通りである。



葉は平糸を渡した上からその糸を押さえるように縫い止める。その上から金糸二本をのせ葉脈をつくり止める。輪郭は同色の空糸で駒止めしてある。

花芯の部分は、よりのない太い糸三本で市松状に糸を渡し止めである。



花びらの方向にそって平糸でやわらかく刺し、その上から細い糸で止める。

その上から花びらの方向にそって平糸をとめるように空糸を渡してとめる。花びらの輪郭は空糸2本を駒止めしてつくり上げている。(水色と白の撚り合せの太い糸)

地の金糸の刺繻を生かした牡丹もようは、金糸の上に空糸4本で花びらを形どって止めている。その空糸は1本づつ駒止めしてある。

図3 金糸の地に花びら模様の刺繻

図2 刺繻糸による牡丹の花びら

金糸の太さ0.5mmのもの2本を一組にして糸幅約1mmの糸(撚りがかかっていない、細い繊維を50本以上束ねたもの)で交互におさえてある。



布はじの金糸は折りまげられている。

このおさえた糸の裏側が写真3である

図4 金糸の止め方

## 2. 児玉資料 コソソテ 192,

### 菊段模様総刺繍コソソテ

(函館北方民族資料館蔵)

#### 形状的特色

形は身幅の細い小袖の形状をしたコソソテである。袖は元禄袖のつけづめになっている。裏布はみられない。

外観は全体に菊が段模様刺繍された総模様になっている。

#### 計測寸法

計測寸法は図5に示した通りである。

刺繍された布幅から推して、あと2～3cmは各個所広くすることができる。しかし、もともとこの幅で製作されたのか、後になってつめたのかは構成、縫製の状態からみるだけでは判断できない。

また、背縫、脇縫の縫製の縫い目が0.8～1cmと大きく、それは布地の厚さからきたものか、縫い直しの際の技術的なものか、初期の着用目的からくるものかはわからない。

#### 刺繍的特色

写真6, 7のように、全体が菊の花

と葉の段模様による総刺繍である。

菊の花は燃りのない平糸を用いて平縫いされ、ふっくらとやわらかく仕上げられ、そのまわりを太糸と思われる太い糸で止められ、菊の花びら一枚一枚を表現している。更に、花と花のすき間は太い糸で平うめしてある。(写真8)

また金糸でうめつくされた葉は、その葉の輪郭を取るように形にそって太い糸が止められている。(写真9)

裏側は写真10のように金糸を止めている糸が密に並んでいる。裏側から見て刺す布は綾形模様の綸子の裏に和紙が当てられ、その下に部分的に羽二重布が合わされている。

刺繍の細かい部分は図6, 7に示した通りである。また、現在は色があせてしまっているが、数色の色が組み合わされて使用されている。衿つけの縫い代の中などにわずかな変色がみられるが製作時の色が鮮やかに残っていたので表1にした。

製作時としたが、厳密にこの色であったかはわからない。只、衿等の縫いしろの中にあつた彩やかな色を大まかにとらえるためにこのトーン色名で分類した。



写真6 児玉資料コソソテ192〔前〕

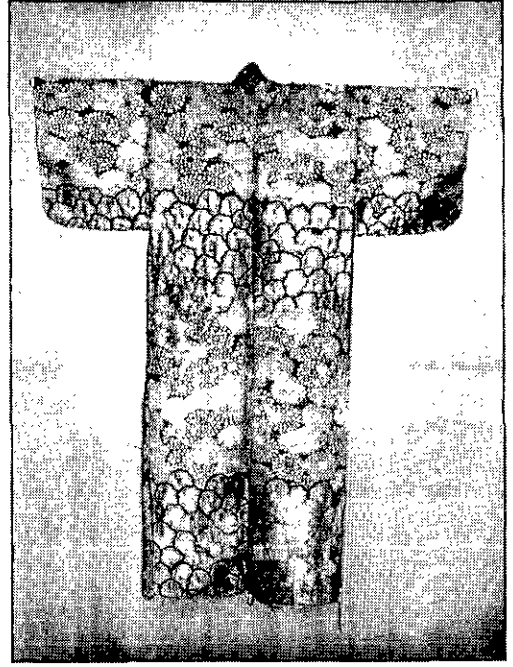


写真7 児玉資料コソソテ192〔後〕

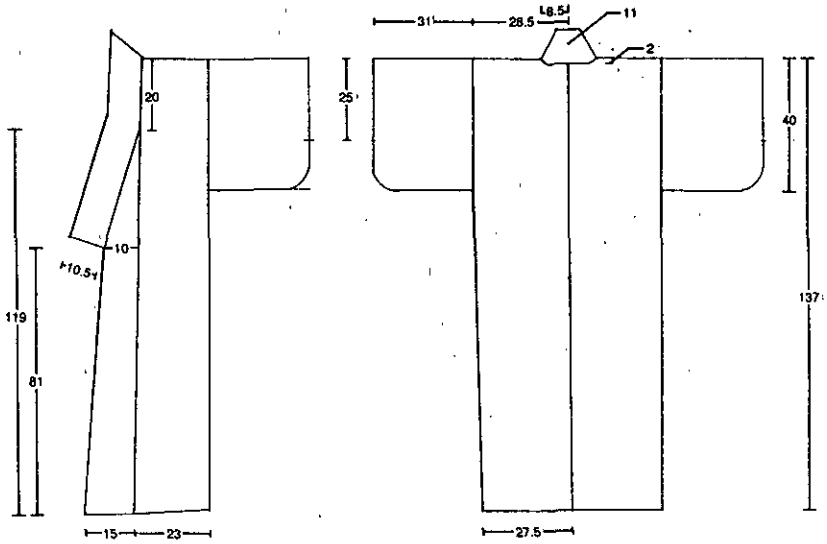


図5 児玉資料(192)コソソテ計測図(単位cm)

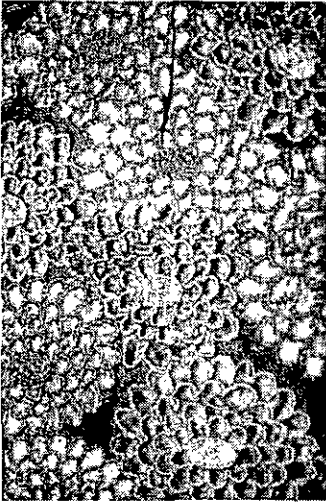


写真8 菊の模様  
(1ヶの花の大きさ5~6cm)



写真9 菊の葉模様(段の境目)

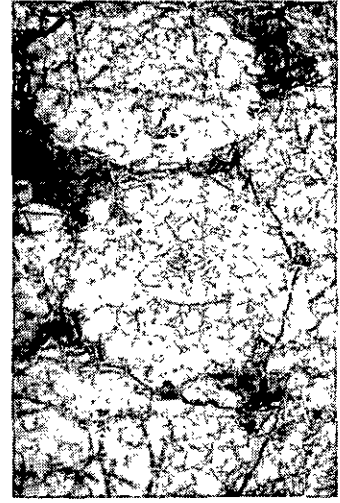


写真10 菊模様の裏側

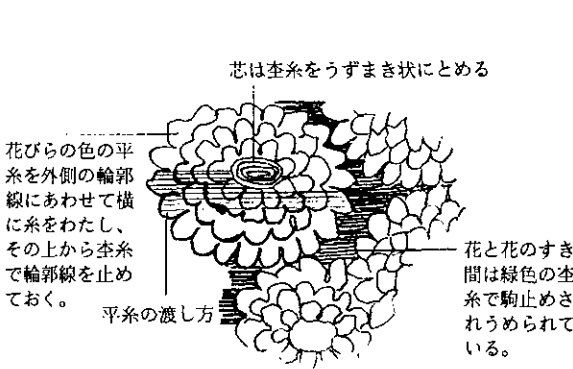


図6 花の部分の刺繻

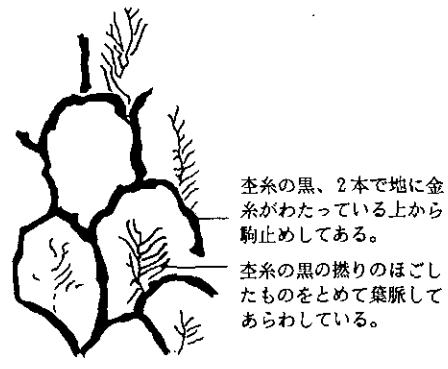


図7 菊の葉の部分の刺繻

表1 菊の花の刺繻糸の色

(PCCS トーン別色分類使用)

花の色分類	花びらの色		輪郭線の色		刺繻の下の和紙の色(現在)
	現在	製作時	現在	製作時	
ベージュの花	5W ブラウンみのしろ	1t8 あさいき	1tg6 ベージュ	g4 グレイみのブラウン	ブラウンみのしろ
うす茶の花	1tg5 ピンクみのベージュ	dk22 くらいむらさき	1tg6 ベージュ	b10 あかるいき	しろ
うす茶の花	1tg5 ピンクみのベージュ	dk22 くらいむらさき	p18 うすいスカイ	1t18 あかるいあお	しろ
白い花	しろ	しろ	p18 うすいあお	b18 あかるいあお	しろ
うすオレンジ花	d5 にぶいオレンジ	dp4 こいあかみのだいたい	1tg5 ピンクみのベージュ	p24 うすいむらさきみのピンク	うすいピンク
うすオレンジ花	d5 にぶいオレンジ	dp4 こいあかみのだいたい	p18 うすいあお	1t18 あさいあお	うすいピンク
うす青の花	p18 うすいスカイ	b17 あかるいあお	d5 にぶいオレンジ	dp4 こいあかみのだいた	しろ



3. 児玉資料 コソソテ 193.

紫編子雪竹蓑模様コソソテ

(函館北方民族資料館蔵)

形状的特色

色は退色しているが紫の編子織の布地で小袖の形をしたコソソテである。5つ紋が金糸でつき、袖丈の広い袖で



写真11 児玉資料コソソテ193〔前〕

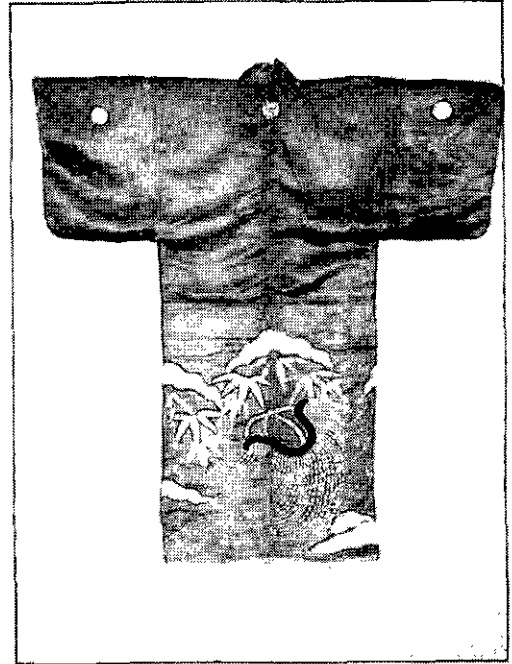


写真12 児玉資料コソソテ193〔後〕

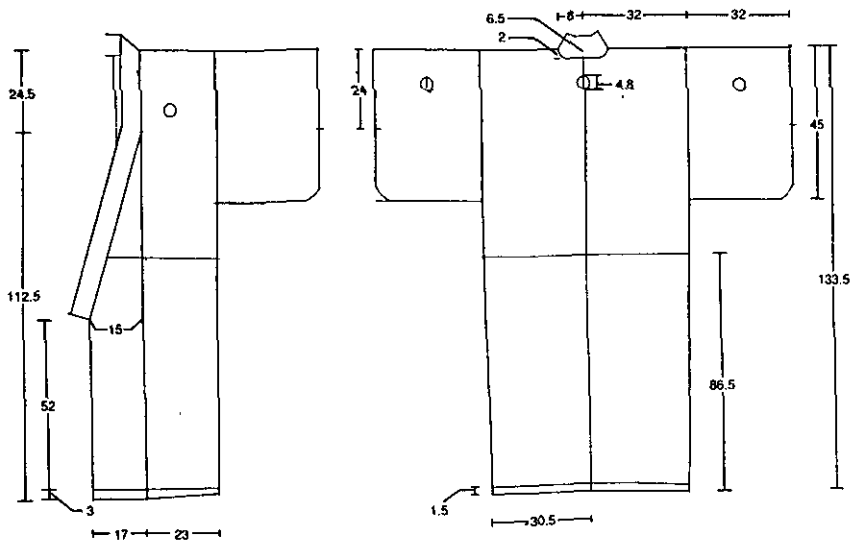


図8 児玉資料 (193) コソソテ計測図 (単位cm)

つけづめである。

小袖全体にうすく綿が入り、身丈の中央部で丈をつめる上げがなされている。裏布は粗い織りの木綿がつけられている。

#### 計測寸法

計測寸法は図8に示した通りである。ただ、身丈中央部で14cmの上げがなされている。袖丈45cm、袖幅32cm、後身幅等から推して江戸時代後期の男物寸法<sup>(8)</sup>である。ところが身丈が上げ分14cm分を加えると148cmとなり男物の小袖としてはひきづり丈になる。紋様の状況、ひきづり丈、粗い木綿の

裏布等、全体の構成上からバランスがとれず、もともとどのような目的で製作された小袖なのか疑問がのこるところである。

#### 刺繍の特色

模様表現は雪と判断される部分は白色の縮緬糸を用いて、止められ、そのまわりを金糸で輪郭を取りながら止めている。蓑や竹の部分は金糸が駒止めされている。

このようなアップリケ状の模様は一般の小袖ではあまりみられない技法である。特別な衣服であったことをうかがい知れるところである。



写真13 コソソテの雪竹籠の模様

4. 児玉資料 コソソテ 194,  
 綸子朱色松竹吉祥模様コソソテ  
 (函館北方民族資料館蔵)

形状的特色

白地の綸子を朱色で染め別け、松、竹、鶴の吉祥模様を刺繍で表現した振り袖と判断されるコソソテである。裾



写真14 児玉資料コソソテ194 [前]

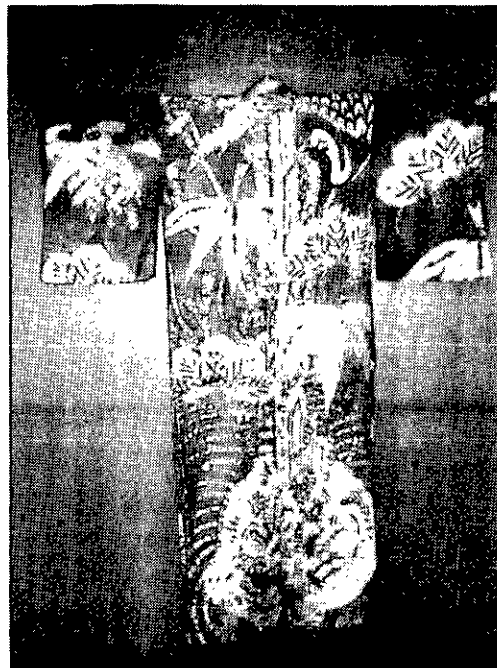


写真15 児玉資料コソソテ194 [後]

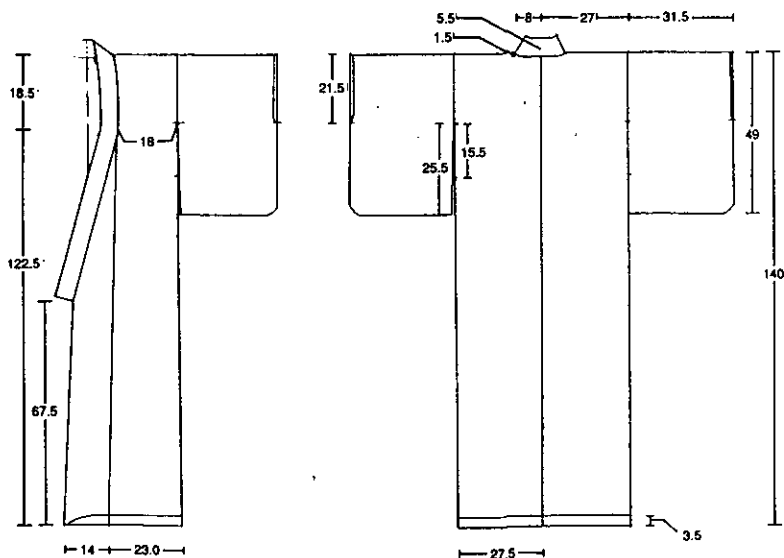


図9 児玉資料(194)コソソテ計測図(単位cm)

には3cmの裾ふきがつき、袖口には1cmのふきがついている。外観の朱色はあせ、袖丈、身幅等いたるところ縫い直しがほどこされている。

刺繍は金糸が模様によって止められ、松やつるの羽の一部は平縫いで縫われている。

#### 計測寸法

計測寸法は図9に示した通りである。この寸法および表面の状況、縫製の状態から判断して背中央、脇、衿のそれぞれの幅で縫いつめられていることがわかる。只、現段階では、解体してもとの寸法を確かめることは不可能なため現在の布幅(36cm)から推して、身幅で5cm位縫いつめられていると思われる。袖丈については、袖下の振りより10cm程度上で、袖下の縫いしろをおさえている縫い目が見られるため、元

の袖丈より最低10cmは短くなっていると思われる。ただ、そのおさえている簇状の縫い目が袖丈の端なのか、あるいはより長かったものがその長さで切られて止められているのかは不明である。

ことに赤い絹の布は貴重品であったため、布裂として別の用途に用いられていることも考えられる。

#### 染織、刺繍の特色

刺繍の模様の下絵のあとが残っているのが見られ、もともと刺繍されていたものが、とれてしまったものかは判断できない。刺繍は、金糸が多く用いられると同時に、鶴の羽や松に平縫いによる技法がみられる。

菊の地模様が入った綸子は、鹿子絞りも組み合わせられ江戸後期の華やかな振り袖だったことがうかがいしれる。



写真16 コンソテの染、刺繍の模様

5. 函館市立北方民族資料館収蔵 コソソテ  
711-39 絹衣  
(菊模様もじり袖)

形状的特色

これは、和人の小袖がアットゥシヤルウンペの形につくり変えられたものである。形状は、計測寸法からみると、衿、衿、袖等小袖の形をなくし、袖に

は別の布によるもじり袖がつけられ、また前裾にも別布がつけられ、身幅は普通の小袖より10cmは広がっている。

絹布部分の刺繍は金糸が止められた菊模様である。

計測寸法

計測寸法は図10に示した通りである。

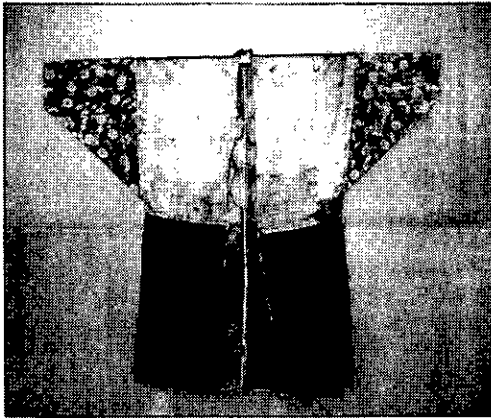


写真17 函館市北方民族資料館 絹衣 (前)

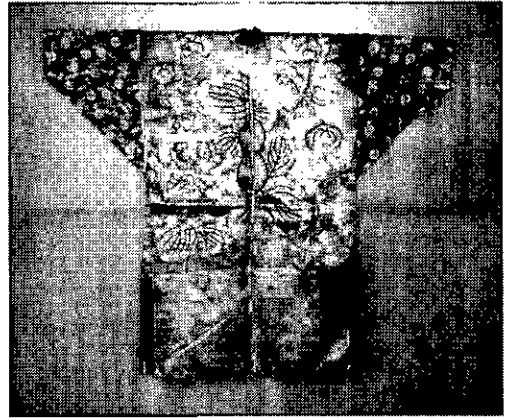


写真18 函館市北方民族資料館 絹衣 (後)

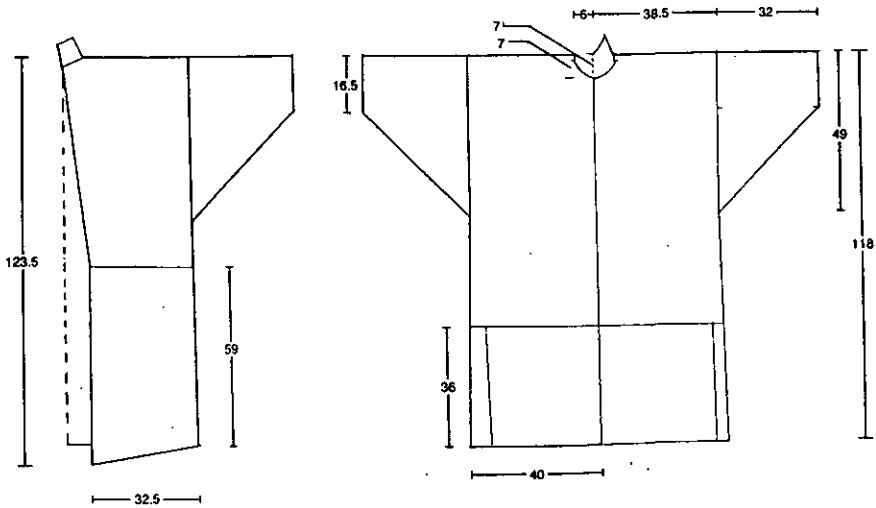


図10 函館北方民族資料館 (39) コソソテ (単位cm)

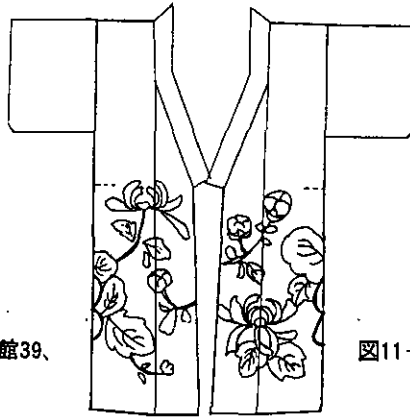


図11 函館北方民族資料館39、  
コソテ  
小袖からの製作図

図11-1 小袖〔前〕

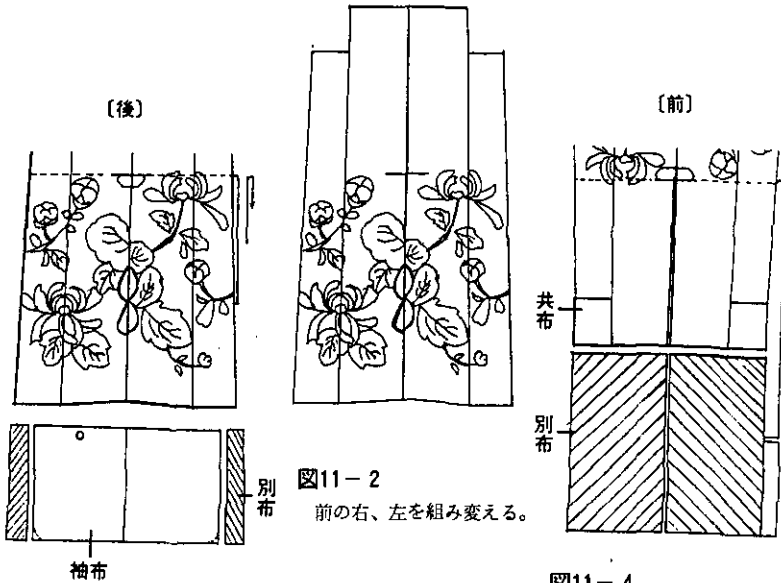


図11-2  
前の右、左を組み変える。

図11-4  
11-2の上部を花柄から折り  
前身頃として使用、裾の不足分  
は別布つける

図11-3  
11-2のものを後にし下に片袖  
を開いてつける

形状的、寸法的に観察をすすめると、刺繍の図柄の構成に不自然なところが見られる。また、後幅の脇よりに縫い目線があることに不審をいだき、もとの小袖の図柄構成の再生を試みると図11のようになることがわかる。そこで図11-2のように脇線を基線に左右を小袖構成図として置き直す。また図11-3のようにそれを後身頃として使用

し、裾の部分にもとの小袖の袖の片方を袖山で切り、開いて後、後裾につける。また、前身頃は衿部分の不足があるのでその部分を別布でつなぐと図11-4のようになる。袖と前裾と後裾の一部に全く別の布をつけるとできる。もとの小袖の前身頃のみで外衣が一着仕上げられていることがわかる。このことから後身頃を使用したもう一

着あるのではないかとと思われるが当館には収蔵されていないので不明である。

和人の小袖ややわらかい絹布が貴重だったことから大切に使い廻しをするアイヌの人の知恵を感じるところがある。

また、元々の小袖は刺繡の技法および構成寸法からみて江戸時代後期のものと判断される。

### 形状、構成的特徴からの考察

以上5点について形状的特色および計測寸法について記した。このうち特に特徴的であった総刺繡のコソテ191、192を中心に刺繡技術等の点から製作時代等について考察をすすめたい。

小袖全体が金糸またはその他の刺繡糸によって仕上げられた模様表現は日本の服飾史の武家衣服、公家衣服、庶民衣服にはみあたらない。「桃山時代に布面を覆いつくすように草花の刺繡でうめ」<sup>(9)</sup>とあるがこの場合は図柄と図柄の間の地は金や銀の箔でおさえとあり、この牡丹模様や菊段模様とは図柄の表現方法や配置からみても桃山時代の小袖とは全く異にするものである。

また、中国の明代の刺繡には丸金糸をすきまなく縫い詰めるということ、また柰糸の使用も見られることから山丹服と共に輸入されたという可能性もあるが、模様の構成、刺繡技術の異なること、縫い合わせの技術の粗さからみて、この輸入とは判断できない。

更に、もし、刺繡技術的に桃山時代の小袖としても、中国明の時代のものとしても、計測寸法からみる構成寸法に疑問が残る。

このことから、再調査の結果、刺繡の台紙になっている紙の裏台布に使用されている布が、江戸時代の藍染木綿と素材、図柄（小紋

柄）が酷似していること、更に観察可能な範囲内で縫い端などを調査した結果、「右」、「左」の文字をかすかに認めることができたことから、国内で江戸期に製作された小袖と判断される場所である。

それではこのような小袖がどのような目的でつくられていたのかが問題になる。前述したように公家、武士の衣装にはこのようなものはみられない。残るは特殊衣装である。

単一模様を大きく図案化し、全体に配置するという表現方法は他の武家等の小袖の意匠にはみられないものである。そこにはそれとは異なる模様もっている雰囲気があり別な美意識を見ることができる。

東京国立博物館染織室長 長崎巖氏によれば、「模様の形状、配置、刺繡の技術から判断して歌舞伎または地芝居の衣装と思われる。江戸時代末期、歌舞伎の衣装は一度ないしは二度ぐらしか使用しなかったものを地方の芝居に流用することは充分考へられる。」との御助言から地芝居について調査した結果、江戸時代から現在まで東北地方、福島県、山形県などでは農閑期の祭礼や盆などには歌舞伎、地狂言がさかんに演じられていたことは資料にて確認できた。江戸時代末期頃の歌舞伎の衣装は江戸において製作されており、とすれば、地芝居用として各地に流れ、それが何かの商取引によりアイヌの手に渡ったと考へられる。193の紫地のコソテも舞台衣装とすれば男物寸法でひきづり丈でも理解できるのである。

前出コソテのところでも記したが、昔アイヌの酋長格の者が儀式の時「——内地の陣羽織をドーフク胴服又はイカワミピ (ikawamip 「上着」) として着用したもので、彼等は威厳を示す服装であった来旨。故に好んで是等古服を求めた為に、内地で不用になったものが相当北海道に流れて入ったらしい。<sup>(10)</sup>

また「——高級品としては徳川時代の武家の婦人の打かけ類が小袖としてアイヌ達が儀式の折晴衣に使用されたものが将来されたものであり——」<sup>(11)</sup> また「——寛丈蝦夷乱のときの反乱の首謀者染退（シブチャリ）（現在の静内）の酋長シャクシャインの砦を発掘したときそこから出土したのは鍋釜、陶器、朱塗の膳腕の他に日本の絹織物が多く出てきた——」<sup>(12)</sup>

等の記述から、和人の小袖や陣羽織や絹織物、綿織物がアイヌの人々の衣生活の中に祭礼着はもとより、やわらかい織物として絹織物が貴重な布製として、入手されていたことがわかる。また木綿の布地もルウンペの紋様を構成する一部として、またチヂリの本体を構成していることから輸入されていたことはよく知られている。このようなことから194の朱色の吉祥模様の振袖がコソソテとして貴重な着物であったことが理解される。この小袖はもようの構成、良質の素材からみて、武家の小袖と考えられよう。

このことは、国後蝦夷の騒乱の折には鎮撫したアイヌに対し「御味方蝦夷として役土人に任用し、賜物を下して之を賞した。その達書に——1小袖壹、米貳拾俵、酒参樽、煙草拾把——」<sup>(13)</sup> とあることから小袖が褒賞品としてアイヌに渡っていたことからわかる。

以上、アイヌ民族は木綿、絹を織る技術を有していなかったことから本邦や山丹交易などの商取引きによる輸入によるか、本邦からの褒賞品として入手するかであったという前提で考察をすすめた。

5点のコソソテの入手経緯、もともとの着用目的の概容を推しはかることができたが古着屋とアイヌ民族との関係など、解明すべきことなど、今後の課題が浮きぼりにされてきた。

## おわりに

本邦ではほとんど残存していない江戸時代後期の舞台衣装や小袖がその形をのこした状態のままコソソテ資料として残されていた背景にはアイヌの人々の間では絹物および小袖が入手しがたい貴重な品物であった故に大切に扱われていたためであろう。今その資料を見ると、コソソテとして貴重な資料であると同時に江戸後期の小袖の資料としても、地芝居の衣裳資料としても、また、その素材、模様、染色、刺繍技術、縫製技術、構成を知る手掛りとしても貴重な服飾資料と判断されるので、その調査をつづける必要がある。また、この地芝居の衣裳については未調査の部分が多く今後、道内の残存資料の調査と同時に関東、東北での地芝居の歴史及びそれにかかわる服飾資料の調査、その流通の経緯を明らかにしたいと考えている。

当調査にあたり御指導いただきました東京国立博物館染織室長 長崎巖氏、共立女子大学教授北村哲雄氏、天理大学附属天理参考館学芸員中谷哲二氏、函館市立北方民族資料館学芸員長谷部一弘氏、釧路市立博物館主査松田猛氏に厚く御礼申し上げます。

また、貴重な児玉資料のコソソテを調査研究資料として御提供、御指導下さいました白老アイヌ民族博物館特別研究員児玉マリ氏に感謝し御礼申し上げます。

本調査研究は北海道新聞社学術文化研究奨励金を得て行なったもので、厚く御礼申し上げます。

また、共同研究者として調査研究に当たった静修短期大学永田志津子助教授の助言によったことを付すとともにまた、この調査研究の一部は1992年度、日本服飾学会総会大会にて研究報告したものであることを記しておく。



引用文献

- (1) 「AN AINU ENGLISH JAPANESE アイヌ英和辞典」 ジョン バチェラー 著 1938年10月 (岩波書店)
- (2) 「アイヌ語、日本語辞典稿」 久保寺逸彦編 1992年3月 (北海道教育委員会)
- (3) 「アイヌの衣文化」 岡村吉右衛門著 1979年1月 (衣生活研究会) p 277 語彙集 (資料篇) より
- (4) 「蝦夷生計図説」(1823年)「蝦夷風俗彙纂前編卷八」(1889年)より (開拓使)
- (5) (3)と同じ
- (6) 「蝦夷風俗画展」1980年 リッカー美術館  
「描かれた近世アイヌの世界蝦夷風俗十二カ月屏風によせて」佐々木利和より。「十二月熊送之図 —— ところでこの絵のアイヌの人々はこれまでの月とも異なった服装をしているのに気づく。—— 右から二人目の女が着てているのは和人交易で得た小袖の類と考へられる ——」
- (7) 児玉資料といわれるのは故児玉作左衛門 北海道大学名誉教授収集のアイヌ民族資料をいう。収集の総類5000点近くにもおよぶ。現在は児玉マリ氏が故人の遺志を引き継ぎ資料の管理や資料にもとづいた研究を行っている。「児玉資料目録」より
- (8) 「日本の美術 No. 67小袖」監修文化庁 他 神谷米子編 1971年12月 p 31  
「第34図、近世小袖実測寸法比較対照表」を参照
- (9) 「染と織の文化史」(NHK 市民大学テキスト) 切畑健著、1989年1月 p 79  
桃山の華より
- (10)(11) 「アイヌ芸術」金田一京助、他著 1973年5月  
北海道出版企画センター より
- (12) 「アイヌの民族」 更科源蔵 1982年 p 145
- (13) 「北海道 土人保護沿革史」北海道庁 1934年 p 34 国後蝦夷の騒乱より